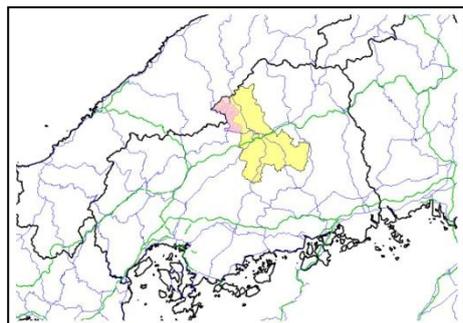


モデル事業名	昔とった杵柄事業～「古老の知恵と技」でコミュニティの元気を創る～
活動団体名	株式会社 わかたの村
ホームページ	http://www.wakatanomura.co.jp
所属/ 担当者名	木原 貴嗣
連絡先	電話 (0824) 55-3530 E-mail:tkihara@wakatanomura.co.jp (上記担当者の連絡先)
活動地域	広島県三次市作木町

● 活動地域の概要

広島市から北へ80キロ、三次市作木町がある。H16年1市7市町村の合併で新三次市となった。人口は昭和25年7500人を数えたが、現在は1800人を割る。高齢化率も50%を超えようとしている。



【位置図】

■ 三次市 ■ 作木町



【谷間にある保育所、小中学校】



【江の川沿いに集落がひろがる】

● 活動地域の課題

昨年の本事業の取り組みから、以下のような事柄が見えてきた。1800人が暮らす作木町に、700人程の65歳以上が占める。典型的な小高年齢地域である。しかしその事は必ずしも課題だけではなく「老人一人が無くなる事は、図書館1館を失うに等しい」といわれるように、長年にわたる経験や体験、思いを巡らし工夫する創造性など多くの文化を継承してきた。①問題なのはそう言った地域の暮らしの文化や技が正に今、消えようとしているこの現状が課題となってきた。これら「地域の記憶」を残し伝え、改めて創る営みへと繋げるかどうか課題であろう。

そして一方、②1年1歳以上に体力や気力が落ち萎えてゆく高齢者。既存の「ふれあいサロン」へ行きたいけど集会所まで歩くのが辛い。市民バスもバス停までが歩き辛い。と籠もりがちに。『予防福祉』のサービスが届かないといった現状がある。③後期高齢者医療費の年金からの天引きがはじまり、益々公的年金の手取りが減ってきた。「年金にもう1万5千円ほどあると暮らしが安心なんじゃが」と年金の話はいきつく。④ボランティアでのサービス提供の限界が見え隠れする。『老老介護』地帯ではマンパワーが不足する。他地域からの導入の構想、実現が望まれる。

「ともいきのさと（共生の郷）づくり」がこれからの目標である。

● 活動の内容

・平成20年度

高齢化の進む中山間地域におけるコミュニティの創生と自立について、次の取り組みにより、今後の方向性について検討する。

- ① 長年の生活経験の賜である「古老の知恵と技」の聞き取り調査を行い、既存の取組である「わかたの村名人体験ツアー」等が、より魅力的になるよう調査結果の整理を行う。
- ② 新たな試みとして「古老の知恵と技」を披露できる「出前講座」を実施する。
- ③ 関係者が地域の情報を共有し、コミュニケーションができるような場をつくるために、人的ネットワークの構築、及びホームページの検討を行う。
- ④ 以上①～③の成果を検証し、今後の活動の方向性について検討する。

・平成21年度

H20では4名の名人さんだけだったが、石工さんや醤油づくり、植林育林・山と木の話、山猟師など「むらの匠」の聞き書きも、昨年にひき続き5名程度進めたい。次年度にはそれぞれの記録を合本とした「漣に掬う」を印刷製本して形としたい。

また、大学生とともに進める聞き取りを『逆デーサービス』という役割も持って高齢者宅を訪問し、要望の強い軽微な生活支援なども併せて実施する。対象者は700人にのぼるが、本年度は20人程度を予定している。

昨年は、作木小・中学校のふるさと授業を担当させていただいた。今年はずっと関わりを深め、小・中学生による『ふるさと巡検ジュニア2009』の実施で、ふるさと作木を知る機会を提供をしたい。4回程度の実施を考える名人さんの技を『出前講座』で披露する事業は引き継ぐが、本年度から三次市より指定管理者の採択を受けた「江の川カヌー公園さくぎ」「川の駅常清」などを会場に『公開講座』の開催を進める。10回程度の開催を目標とする。



● 活動の成果

・平成20年度

①古老の聞き書き作業は対象が少数ではあったが、古老間におけるロコミで「わしのはなしもきいてもらいたい」といった申し出を受けるなど、いわば普通の人の普通の暮らしによる「自分史」づくりへのヒントをえたことは今後への大きなヒントとなっている。

②生活交通に関わる実験は、現在運行する市民バスの次の時代の運行実験の持たせて進めたが、高齢者の移動に関しては、「ドアからドア」への移動など希望が多くなってきている。きめ細かな配車、運行への希望は身体が年々不自由になる高齢者にとっては切実な願いである事を実感している。

③作木出身者のリストアップから数回の情報提供で初年度は終わったが、ふるさとに対する想いは歳とともに大きく強くなるといった反響が大きく、ふるさとのためにお役に立ちたいと言った返事なども多く頂けた。

この「新たな公」のよる一連の取り組みなどから、高齢者、精神、身体障害者などと農林業に関わる事を目指した「ともいきのさと（共生の郷）づくり」構想も、三次市の要請によりとりまとめをするなど、活動の成果や成果物の利・活用が他の分野、場面で活用できた事は、この事業の大きな成果の一つである。

・平成21年度

（活動の状況、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入）

① 古老の聞き取り・聞き書き作業

山林作業、育林など山に関わる暮らしの聞き書きや米づくりの副産物である藁の活用である畳づくりなど、むらの匠聞き取りを中心に作業を進めた。昨年の反響から、社会福祉協議会作木支所や作木中学校との連携で、高齢者の「自分史」づくり運動ができないかと、「聞き書き」作業の予防福祉面での期待も強く次年度以降への展開が期待されるひろがりが見られている。また、本年度から三次市より指定管理者の採択を受けた「江の川カヌー公園さくぎ」「川の駅常清」などを会場に『出前講座』の開催を進めている。



② 『なんでもバス』の運行実験

使い便利のいい生活交通、今後の生活交通の維持継続のためにコスト削減をめざす実証実験として、貨物輸送と併せた「ひと・もの・こと」を同時に輸送する実験を試みた。「ひと」に関してはこれまで同様個人対応に近い運行で期待も、成果もあったが、「もの」「こと」の業務は、掘り起こしに時間がかかり、今回は十分な成果を見ることができなかった。



③ 『ZiZiBaBa ビジネス』 応援事業

高齢者の所得の向上を願って情報提供やサポート作業を進めた。家庭菜園でできた農産物の加工など進めた。むらの名人さんの発掘も進め、出番づくりも期待が大きい。高齢者宅への「農家民泊」をこれからの大きなテーマとして取り組みたいと考えている。

④ ふるさとコミュニティ形成事業

昨年の作木出身者のリストアップ作業から、作木自治連合会の協力を受け作木情報の郵送での提供作業を進め、ふるさと交流への下地づくりをする事ができた。

ふるさと作木への想いは歳をとるとともに強くなるようで、情報提供や交流事業への期待が大きい事を改めて実感している。

● 今後の課題及び展望

① 社会実験的取り組みを企画し進めてきたが、貨物輸送、人の輸送、宿泊に関する法律など多くの規制があり、小規模、単発であってもなかなか壁が厚く、十分な実験データがえられるまでの作業ができなかったことが悔やまれる。

② 思いの外地域、集落の疲弊、特に人的力が弱くなってきているのが気がかりで、地域の皆さんと作業を進めたいと企画し動きは始めるが、その途中でも病気や意欲がなくなるなど、高齢者の多い地域や高齢者を対象としたプログラムの展開のむつかしさを痛感している。

③ 地域プラットフォームの展開を構想するがなかなか円卓についてもらえるところまでに至らない状況がある。各種団体、行政も含め、ゆとりを失ってきているように思われる。

・展望

そのほかにも課題は数々あり、さらに困難な状況は増す事が予想されるが、地域の暮らしを守り、願わくば創る営みへと続けてゆきたい。そのためにも、地域の情報や知恵、ものや技術などが集まる「地域プラットフォーム」の設立が望まれる。